講談社版
日本現代文學全集
24
田山花袋集
書庫

日本現代文學全集・講談社版 21

田山花袋集

日本現代文學全集
21
田山花袋集

編集
伊藤整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉

昭和37年6月19日　第1刷
昭和37年7月20日　第2刷

定價　500圓

© KŌDANSHA 1962

著者　田山花袋（たやまかたい）

發行者　野間省一

印刷者　北島織衞

發行所　株式會社　講談社
東京都文京區音羽町3～19
電話大塚大代表（941）3111
替東京3930

印刷　大日本印刷株式會社
寫眞製版印刷　株式會社興陽社
製函　株式會社岡山紙器所
株式會社第一紙藝社
背革　株式會社石井
表紙クロス　日本クロス工業株式會社
口繪用紙　日本加工製紙株式會社
本文用紙　本州製紙株式會社
函貼用紙　安倍川工業株式會社
見返し用紙　三菱製紙株式會社
扉用紙　神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかへいたします

田山花袋集　目次

卷頭寫眞

筆　蹟

重右衞門の最後……五

少女病……三四

蒲　團……四二

田舍教師……七三

ある朝……一七三

時は過ぎゆく……一七六

百　夜……三〇九

露骨なる描寫……四三三
東京の三十年（抄）……四三五
紅葉の病死……四三五
丸善の二階……四三六
小諸の古城址……四三九
私のアンナ・マール……四四〇
龍土會……四四三
獨歩の死……四四三
『生』を書いた時分……四四七
田舍教師……四四九
二葉亭の死……四五二
作品解說……平野　謙　四五四
田山花袋入門……瀨沼茂樹　四五九
年　譜……四六八
參考文獻……四七七

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

田山花袋集

車經往子向誰說一路寒山

舞我書帷看天王送詠春溪

聲依旧送鳴咽

茅盛生

重右衛門の最後

一

五六人集つたある席上で、何ういふ拍子か、ふと、魯西亞の小說家イ、エス、ツルゲネーフの作品に話が移つて、ルウヂンの末路や、バザロフの性格などに、いろ〳〵興味の多い批評が出た事があつたが、其時なにがしといふ男が、急に席を進めて、「ツルゲネーフで思ひ出したが、僕は一度獵夫手記の中にでもありさうな人物に田舍で邂逅して、非常に心を動かした事があつた。それは本當に、我々がツルゲネーフの作品に見る魯西亞の農夫そのまゝで、自然の力と自然の姿とをあの位明かに見たことは、僕の貧しい經驗には殆ど絕無と言つて好い。よく觀察すれば、日本にも隨分アントニイ、コルソフや、ニチルトツフ、ハーノブのやうな人間はあるのだ」と言つて話し出した。

二

まアずつと初めから話さう。自分が十六の時始めて東京に遊學に來た頃の事だから、もう餘程古い話だが、其頃麴町の中六番町に速成學館といふ小さな私立學校があつた。英學、獨逸學、數學、漢學、國學、何でも御座れの荒物屋で、重に陸軍士官學校、幼年學校の試驗應募者の爲めに必須の課目を授くるといふ、今でも好く神田、本鄕邊の中通に見るまことにつまらぬ學校で、自分等が知つてから二年ばかり經つて、其學校は潰れて了ひ、跡には大審院の判事か何かゞ、その家を大修繕して、裕かに生活して居るのを見た。けれど其古風な門は依然たる昔の儘で、自分は小倉の古袴の短いのを着、肩を怒して、得々として其門に入つて行つたと思ふと、言ふに言はれぬ懷かしい心地がして、其時分のことが簇々と思ひ出されるのが例だ。で、何うして自分が其學校に通ふ事に爲つたかと言ふと、夫は自分が陸軍志願であつたからで自分の兄は非常な不平家の處から、規則正しい學校などに入つて、二年も三年も懸つて修業するのなら誰にでも出來る、貴樣は少くともそんな意氣地の無い眞似を爲てはならぬ。何でも早く勉强して、來年にも幼年學校に入るやうにしなければ、一體男兒の本分が立ぬではないか。と言つた風に油を懸けられたので、それで當時規則正しい、陸軍志願の學生には唯一市の校良と言はれた谷の成城學校にも入らずに、態々速成といふ名に惚れて、そのつまらぬ學校の生徒と爲つたのであつた。今から思ふと、隨分愚かな話ではあるが、自分はいくらか兄の東洋豪傑流の不平に感化されて居つたから、それを好い事と深く信じ、來年は必ず幼年學校に入らなければならぬと頻りに學問を勵んで居た。

忘れもせぬ、自分の其學校に行つて、頗に悲のある數學の教師に代數の初步を學び始めて、まだ幾日も經ぬ頃に、新に入學して來た二人の學生があつた。一人は髮の毛の長い、色の白い、薄痘痕のある、背の高い男で、風采は何所となく田舍臭いところがあるが、其の柔和な眼色の中には何所となく人を引付ける不思議の力が籠つて居て、一見して、僕は少なからず氣に入つた。一人はそれとは正反對に、背の低い、色の淺黑い瘦こけた體格で、其顏には極く單純な思想が顯はれて居るばかり、低頭勝なる眼には如何なる空想の影をも宿して居るやうには受取れなかつた。二人とも綿の交つた黑の毛糸の無意氣な襟卷を首に卷付けて、舊い舊い流行後れの黑の中高帽を冠つて（學生で中高帽などを冠つて居るものは今でも少い）それで、傍で聞いては、何とも了解らぬやうな太甚しい田舍訛で、互に

何事をか聲高く語り合ふので、他の學生等はいづれも腹を抱へて笑はぬものは無い。

「イツト、エズ、エ、デツク」

とナショナルの讀本の發音が何うしても滿足に出來ぬので、二人はしたゝか苦しんで居たが、ある日、教師から指名されて、「ズー、ケツト、ラン」と讀方を初めると……、

生徒は一同どつと笑つた。

漢學の素讀の仕方がまた非常に可笑しかつた。文章軌範の韓退之の宰相に上るの書を其時分我々は讀んで居つたが、それを一種可笑しい、調子を附けずには何うしても讀めぬので、それが始まるといつも教場を賑はすの種とならぬ事は無かつたのである。

ある日、自分が課業を終つて、あたふたとその學校の門を出て行くと、自分より先にその田舍の二人が丸で兄弟でもあるかの樣に、肩と肩とを摩合せて、頻りに何事をか話しながら歩いて行く。

聲を懸けようと思つたけれど、默つて自分は先へ行つて了つた。

次の日も二人睦しさうに並んで行く。

矢張聲を懸けなかつた。

次の日も……

又其次の日も矢張同じやうに肩を摩り合せて、同じやうにさも睦しさうに話し合つて行くので、彼等は一體何所に行くのか知らん、自分等の歸る方角に歸つて行くのか知らんと思ひながら、ふと、

「君達は何處です」

と突然尋ねた。

急に答は爲ずに丁寧に會釋してから、

「私等ですか、私等は四谷の鹽町に居るんでがすア」

と背の高い方がおづ〳〵答へた。

「僕も四谷の方に行くんだ？」

と自分も言つた。其頃自分は牛込の富久町に住んで居たので、其處に歸るには是非四谷の鹽町は通らなければならぬ。否、四谷の大通には夜などよく散歩に出懸る事がある身の、鹽町附近の光景には一方ならず熟して居る。玩弄屋の隣に可愛い娘の居る砂糖屋、その向ふに松風亭といふ菓子屋、鍛冶屋、酒屋、其前に新築の立派な郵便電信局……。

二三歩歩いてから、

「鹽町つて、……僕はよく知つてるが、鹽町の何處です、君達の居る家は……」

「鹽町の……湯屋の二階に來て居るんでさア」

「湯屋つて言へば、あの角に柳のある？」

「左樣でがさア」

「それぢや僕も入つた事がある湯屋だ。彼處には背の低い、にこにこした妻君が居る筈だ」

「好く知つて居やすナア」

と驚いた樣子。

「それぢや、いつでも僕が歸る道だから、これから一所に歸らうぢやありませんか」

「さう願へりや、はア結構だす……」

と背の低い方が答へた。

又二三歩默つて歩いた。

「それで君達の國は一體何處です？」

「私等の國ですか、私等の國は信州でがすが……」

「信州の何處？」

「信州は長野の在でがすア」

「何時東京に來たのです」

「去年の十二月、來たんですが、山中から、はア出て來たもんだで、爲體が分らないでえら困りやした」

「鹽町の湯屋は親類ですか」

「親類ぢやありやしねえが、村の者で、昔村で貧乏した時分、私等の親が大層世話をした事がある男でさア。十年前に國元ア夜逃げす

る様にして逃げて來たゞが、今ぢやえら身代のう拵へて、彼地處でア、まア好い方たつて言うたが、人の運て言ふものは解らねえものだす」

自分はこの時からこの二人に親しく爲つたので、段々話を爲て見ると、言ふに言はれぬ性質の好い處があつて、背の高い方は田舍者に似合はぬ才をも有つて居るし、又背の低い方は自分と同じく漢詩を作る事を知つて居るので、一月もその同じ道を伴立つて歸る中には、十年も交つた親友のやうに親しくなつて、互の將來の思想も語り合へば、互の將來の目的も語り合つて、時間の都合で一所に歸られぬ時は非常に寂しく感ずるといふ程の交情になつて了つた。自分は四谷御門の塵埃の間を歩きながら、幾度二人に向つて、陸軍志願を勸めたであらうか。幾度二人に漢學の修養の必要を說いたであらうか。自分は其頃兄に敎はつて居た白文の八家文の難解の處を讀み下し、又は卽席に七絕を賦して、大いに二人を驚かした。ことに背の低い山縣行三郎といふのは、自分の漢詩に巧であることを知つて、喜んでその自作の漢詩を示し、好くその故鄕の雪の景色を說明して自分に聞かせた。自分の若い空想に富んだ心は何んなにその二人の故鄕の雪景色なるものを想像したであらうか。二人は言ふのである。自分の故鄕は長野から五里、山又山の奧で其の景色の美しさは、とても都會の人の想像などでは解りこは無えだアと。否、そればかりではない、背の低い山縣は學問の時間の間に、その古い手帳をひろげて、其處に描かれたる拙い一枚の寫生圖を示し、これが私の家、これが杉山君の家、こゝにこんもりと茂つて居るのは村の鎭守、それから少し右に寄つて同じ木立のあるのは安養寺といふ村の寺、私等の逃げて來たのは（かれ等は親の許さぬのに、靑雲の志に堪へかねて脫走して來たのである）十二月の十三日の夜で、地上には雪が四五尺も積つて、それの堅く氷つてる上に、月が寒く美しく照り渡つて、何とも言へない光景だつた。私は杉山君と晝間約束して置いたから、鎭守の向ふに行つて待つて居ると、やがて杉山君は遣つて來る。二人連れ立つて歩み出す。追手のかゝらぬやうに爲るには何でも夜の中に長野に行つて、明日の一番の汽車に乘らなければならぬ。と言ふので、一生懸命に歩いたが、村が見えなくなつた時は流石に胸が少し迫つて、親達は嘸驚く事であらう。こんな無理な事を爲ないでも、打明けて賴んだなら、公然東京に出して吳れるであらうと思つた……などといふ事を自分に話した。自分はいよいよ空想を逞うして、其村、その靜かな山の中の村に一度は是非行つて見度いと、其頃から自分の胸はその山中の一村落に向つて波打つゝあつたので……。猶詳しく聞くと、その村には尾谷川といふ淸い谿流もあるといふ。その岸には水車が幾個となく懸つて居て、春は躑躅、夏は卯の花、秋は薄とその風情に富んで居ることは晝にも見ぬところである相な。又その村の山の畠には一面雪ならぬ蕎麥の花が咲き揃つて、秋風のさびしく其上を吹き渡る具合など君でも行つたなら、何んなに立派な詩が出來るか知れぬとの事。あゝ本當にその仙境はどんな處であらうか。山と山とが重り合つて、其處に淸い水が流れて、朴訥な人間が鋤を荷つて夕日の影にてく〳〵と家路をさして歸つてゆく光景。それを想像すると、空想は空想に枝葉を添へて、何だか自分の眼の前には西洋の讀本の中の仙女の故鄕がちらついて何うも爲らぬ。

三

二人の寄寓して居る麴町の湯屋の二階、其處に間もなく自分は行くやうになつた。二階は十二疊敷二間で、階段を上つたところの一間の右の一隅には、欅の眩々した長火鉢が据ゑられてあつて、鐵の五德に南部の錆びた鐵瓶が二箇懸つて、その後にしつかりした錠前の附いた總桐の簞笥がさも物々しく置かれてある。總じて室の一體の裝飾が、極く野暮な商人らしい好みで、その火鉢の前にはいつもでつぷりと肥つた、大きい頭の、痘痕面の、大縞の綿袍を着た五十ばかりの中老漢が趺座をかいて坐つて居るので、それが又自分が訪

ねると、いつも笑ひながら丁寧に會釋を爲るのが常であつた。この主人公が卽ち二人の山の中から出身した昔の無賴漢なるもので、二十年前には村の中にも其五尺の身を置く事が出來なかつたのであるが、人間の運といふものは解らぬ者で、二十九歲の時に夜逃を爲して、この東京に遣つて來て、蕎麥屋の擔夫、質屋の手傳、湯屋の三助とそれからそれへと辛抱して、今では兎に角一軒の湯屋の主人と成り濟して、財產の二三千も出來たといふ、まア感心すべき部類に入れても差支ない人間であつた。であるから自分の村の者と言へば、隨分一肌拔いで、力にもなつて遣るので、その山の中から來た失意の人間は、多くはこれを便つて來て、三助から段々湯屋の主人に立身しようとして居る人間も隨分あるといふ事だ。全體信濃のその二人の故鄕といふのは、越後の方に其境を接して居るから、出稼といふ一種の冒險心には此上もなく富んで居るので、また現在その冒險に成功して、錦を故鄕に飾つた例はいくらも眼の前に轉つて居るから、志を故鄕に得ぬものや、貧窶の境に沈淪して何うにも彼うにもならぬ者や、自暴自棄に陷つた者や、乃至は靑雲の志の烈しいものなどは、恰も溪流の大海に向つて流れ出づるが如く、日夜都會に向つて身を投ずるのを躊躇しないのであつた。あゝこの山中の民の冒險心。

で、自分は愈〳〵その山中の二人の靑年と親しくなつて、果ては殆ど每日のやうにその二階を訪問した。春はやゝ過ぎて、夕の散步の好時節になると、自分はよく四谷の大通を散步して、歸りには必ずその柳のある湯屋に寄つてみる。すると、二階の上から田舍の太神樂に合せる橫笛の聲がれろ〳〵、ひーひやらりと面白く聞えて、月がその物干臺の上に水の如く照り渡つて、その背の低い山縣の姿が、明かな夜の色の中に黑くくつきりと際立つて見える。

「おい、山縣君！」

と下から聲を懸ける。

と……笛の音がぱつたり止む。

「誰だか」

と續いて田舍訛の聲。

「僕、僕、富山！」

「富山君か、上んなはれ」

その物干臺！　その月の照り渡つた物干臺の上で、自分等は何んなにその美しい夜を語り合つたであらうか。今頃は私等の故鄕でもあの月が三峯の上に出て、鎭守の社の廣場には、若い男や若い女がその光を浴びながら何の彼のと言つて遊び戲れて居るであらう。斑尾山の影が黑くなつて、村の家々より漏るゝ微かな燈火の光！　ああ歸りたい、歸りたいと山縣は懷鄕の情に堪へないやうに幾度もいふ。自分も何んなにその靜かな山中の村を想像したであらうか。

半年程立つた頃、自分は又その同じ村の靑年の脫走者を二人から紹介された。顏の丸い、髮の前額を蔽つた二十一二の靑年で、これは村でも有數の富豪の息子であるといふ事であつた。けれど自分は杉山からその新脫走者の家の經歷を聞いたばかり、別段二人ほど懇意にはならなかつた。杉山の言ふ所によると、その根本（靑年の名は根本行輔と言ふので）の家柄は村では左程重きを置かれて居ないので、今でこそ村第一の富豪などゝ威張つて居るが、親父の代までは人が碌〳〵交際も爲ない程の貧しい身分で、その親父は現に村の鎭守の賽錢を盜んだ事があつて、その二十七八の頃には三之助（親父の名）は村の爲めに不利な事ばかり企らんでならぬ故いつそ筵に卷いて千曲川に流して了はうではないかと故老の間に相談されたほどの惡漢であつたといふ事である。それがある時、其頃の村の俄分限の山田といふ老人に、貴樣も好い年齡をして、いつまで村の衆に厄介を懸けて居るといふ事もあるまい。もう貴樣も到底村では一旗擧げる事は難しい身分だから、一つ奮發して、江戶へ行つて皆の衆を見返つて遣らうといふ氣は無いか。私などを見なされ、一度は隨分村の衆に馬鹿にされて、口惜しい〳〵と思つたが、今では何うやらかういふ身になつて、人にも立てられる樣になつた。三之助、貴樣

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

は本當に一つ奮發して見る氣は無いか。と懇々説諭されて、鬼の眼に涙を拭き〳〵、餞別に貰つた金を路銀にして、それで江戸へ出て來たが、二十年の間に、何う轉んで、何う起きたか、五千といふ金を攫んで歸つて來て、田地を買ふ、養蠶を爲る、金貸を始める、瞬く間に一萬の富豪！　だから、村では根本の家をあまり好くは言はぬので、その賽錢箱の切取つた處には今でも根本三之助竊盜と小さく書いてあつて、金を二百圓出すから、何うかそれを造り更へて呉れろと賴んでも、村の故老は斷乎としてそれに應じようともせぬとの事である。その長男がまた新しい青雲を望んで、ひそかに國を脱走するといふのは……何と面白い話では無いか。

けれど自分がこの三人と交際したのは纔か二年に過ぎなかつた。山縣は家が餘り富んで居ない爲め、學資が續かないで失望して歸つて了ふし、根本は家から迎ひの者が來て無理往生に連れて行つて了ふし、唯一人杉山ばかり自分と一緒に其志を固く執つて、翌年の四月陸軍幼年學校の試驗に應じたが自分は體格で不合格、杉山は亦學科で失敗して、それからといふものは自分等の間にもいつか交通が疎くなり、遂には全く手紙の交際になつて了つた。杉山は猶暫く東京に滯つて居た樣子であつたが、耳にするその近狀はいづれも面白からぬ事ばかりで、やれ吉原通を始めたの、筆屋の娘を何うかしたの、日本授產館の山師に騙されて財產を半分程失くしたのと全く自暴自棄に陷つたやうな話であつた。それから一年程經つて失敗に失敗を重ねて、茫然田舍に歸つて行つた相だが、間もなく微兵の圖が當つて高崎の兵營に入つたといふ噂を聞いた。

四

五年は夢の如く過ぎ去つた。

其の五年目の夏のある靜かな日の事であつた。自分は小山から小山の間へと縫ふやうに通じて居る路を喘ぎ〳〵傳つて行くので、前には僧侶の趺座したやうな山が藍を溶したやうな空に巍然として聳えて居て、小山を開墾した畑には蕎麥の花がもうそろ〳〵その白い美しい光景を呈し始めようとして居た。空氣は此上も無く澄んで、四面の山の涼しい風が何處から吹いて來るとも無く、自分の汗になつた肌を折々襲つて行くその心地好さ！　これは山でなければ得られぬ賜と、自分はそれを眞袖に受けて、思ふさま山の清い澄氣を吸つた。十年都會の塵にまみれて、些の清い空氣をだに得ることの出來なかつた自分は、長野の先の牟禮の停車場で下りた時、その下を流るゝ鳥居川の清溪と四邊を圍む青山の姿とに、既に一方ならず心を奪はれて、世にもかゝる自然の風景もあることかと坐ろに心を動かしたのであるが、溪橋を渡り、山嶺をめぐり、進めば進むほど、行けば行くだけ、自然の大景は丁度盡きざる繪卷物を廣げるが如く、自分の眼前に現はれて來るので、自分は益々興を感じて、成程これでは友が誇つたのも無理ではないと心から思つた。

小山と小山との間に一道の谿流、それを渡り終つて、猶其前に聳えて居る小さい嶺を登つて行くと、段々四面の眺望がひろくなつて、今迄越えて來た山と山との間の路が地圖でも見るやうに分明指點せらるゝと共に、この小嶺に塞がれて見得なかつた前面の風景も、俄かにパノラマにでも向つたやうにはつと自分の眼前に廣げられた。

上州境の連山が丁度屏風を立廻したやうに一帶に連り渡つて、それが藍でも無ければ紫でも無い一種の色に彩られて、ふは〳〵とした羊の毛のやうな白い雲が其絕巔からいくらも離れぬあたりに極めて美しく靡いて居る工合、何とも言へぬ。そして自分のすぐ前の山の、又その向ふの山を越えて、遙かに帶を曳いたやうな銀の色のきらめき、あれは恐らく千曲の流れで、その又向ふに續々と黑い人家の見えるのは、大方中野の町であらう。と思つて、ふと少し右に眼を移すと、千曲川の沿岸とも覺しきあたりに、絕大なる奇山の姿！

何と言ふ山か知らん……と自分は少時その好景に見惚れて居た。

ふと背負籠を負つた中老漢が向ふから上つて來たので、

「あの山は？」

と指して尋ねた。

「あれでがすか、あれははア、飯山の向ふの高社山と申しやすだア」

あれが高社山！　よく友の口から聞いたと思ふと、其時の事が簇簇と思ひ出されて今更其頃が懐かしい。其頃は其仙境を何時尋ねて行かれるであらうか、或は一生尋ねて行く事が出來ぬかも知れぬなど〻思つて居たが、五年後の今日かうして尋ねて行くとは、如何に縁の深い事であらう。

「鹽山村へはまだ餘程あるかね」

「鹽山へかね」と背負籠を傍の石の上に下して、腰を伸しながら、「鹽山へは此處からまだ二里と言ひやすだ。あの向ふの大い山の下に小い山が幾箇となく御座らつせう。その山中だアに……」

「鹽山に根本といふ家はあるかね」

と自分は更に尋ねた。

「根本……御座らしやるとも、根本ていのア、鹽山では一等の丸持大盡でごわすア」と答へて、更に、「で貴郎ア、根本さア處の御客樣かね」

「其處に行輔といふ子息が有るだらう？」

「御座らつしやる」と言つて吸ひ懸けた烟草の烟を不細工な獅子鼻からすうと出し、「大盡どこの子息に似合ねえ堅い子息でごわすア、何でも東京へ行かしつた時にア、それでも四五百も遣つたといふ噂だが、それから堅くなつて、今ぢや村でも評判ものでごわす」

「一體汝は何處だね？　鹽山かね」

「いんにや、鹽山ではごへん、その一つ前の村の倉澤でごわす」

「もう根本は女房を持つたらう」

「嘆さまでごわすか、持ちましたとも、……えいと……あれは確か三年前で、芋子村の大盡の娘さアだ」

「子供は？」

「まだごわしねえ、もう出來さうな者だつて此間も父樣えらく心配のう爲で御座らしやつたけ」

「それでは山縣といふのも知つてるだらう」

「山縣――はア學校の先生樣だア、私等が餓兒も先生樣の御蔭にはえらくなつてるだア。好い優しい人で、はア」

「それでは杉山は何うしてるね」

「えらく、貴郎ア、鹽山の人の名前知つて御座らつしやるだア。貴郎ア、若い者等が東京に出た時懇意に爲すつて居た先生だかね……」

言懸けてじろ〳〵と自分の顔を見て、

「……杉山の子息……あれア、今は徴集されて戰爭（日清戰爭）に行つてるだ。あの山師にや、村ではもう懲々して居るだア。長野に興業館といふ東京の山師の出店見ていなものを押立てて、藥材で染物のう御始めるつて言つて、何も知らねえ村の者を騙くらかして、何でもはア五六千圓も集めたゞア。それを皆な妾を置いたり、藝妓を家に引摺込んだり、遊廓に毎晩のやうに行つたり、二月ばかりの中に滅茶〳〵にして仕舞つたゞア。……恐ろしい虚言家でナ、私等も既の事欺騙かされる處でごわした」

「家は今何うしてるね」

「家でごすか、餘程あれの爲めに金のう打遣つたでがすが爺樣まだ確乎して御座らつしやるし、廿年前までは村一番の大盡だつたで、まだえらく落魄ねえで暮して御座るだ」

と言つたが、ふと思出した樣に、

「鹽山つていふ村は、昔からえらく變り者を出す所でナア、それが爲めに身代を拵へる者は無えではねいだが、困つた人間も隨分出るだア」

「今でも困つた人間が居るかね」

中老漢は岩の上に卸した背負籠を擔つて、其儘歩き出さうとして居たが、自分に尋ねられて、

「つい、今もそれで大騒ぎをして居るだア」

と言つた。

そして、その大縣の何を意味して居るかを語らずに、其儘急いで向ふへと下りて行つて了つた。自分は猶少時其處に立つて、六年前の友が何んな生活を爲て居るであらうかといふ事、其妻は如何なる人で、其家は如何なる家で、その家庭は何んな具合であるかといふ事などを思ふと、種々なる感想が自分の胸に潮のやうに集つて來て、其山中の村が何だか自分と深い宿緣を有つて居るやうな氣が爲て、何うも爲らぬ。

一時間後には、自分はもう其懷かしい村近く歩いて居た。成程山又山と友の言つたのも理と思はるゝばかりで、溪流はその重り合つた山の根を根氣よく曲り曲つて流れて居るが、或ところには風情ある柴の組橋、或るところには龍の住みさうな深い青淵、或は激湍沫を吹いて盛夏猶寒しといふ白玉の溪、或は白籐虹を掛けて全山皆動くがごとき飛瀑の響、自分は幾度足を留めて、幾度激賞の聲を擧げたか知れぬ。で、その曲り曲つた溪流に添つて、涼しい水の調に耳を洗ひながら、猶三十分程も進んで行くと、前面が思ひも懸けず俄かに開けて、小山の丘陵のごとく起伏して居る間に、黃稻の實れる田、蕎麥の花の白き畑、鬱蒼と茂れる鎭守の森、ところ〴〵に碁石を並べたやうに、散在して居る茅葺の人家。

手帳の畫がすぐ思出された。

あゝこの靜かな村！　この村に向つて、自分の空想勝なる胸は何んなに烈しく波打つたであらうか。六年間、思ひに思つて、さて今のこの一瞥。

殊に自分は世の塵の深きに泥れ、久しく自然の美しさに焦れた身、それが今思ふさまその自然の美を占める事が出來る身となつたではないか。この靜かな村には世に疲れた自分をやさしく慰めて呉れる友二人まであるではないか。

顧みると、夕日は既に低くなつて、後の山の影は遠くその鎭守の森に及んで居る。空はいよ〳〵深碧の色を加へて、野中の大杉の影はくつきりと線を引いたやうに、その午後の晴やかな空に聳えて居る。山縣の家は何でもその大杉の陰と聞いて居たので、自分は眼を放つてじつと其方を打見やつた。

靜かな村！

五

と思つた途端、ふと自分の眼に入つたものがある。大杉の陰に簇簇と十軒ばかりの人家が黑く連つて居て、その向ふの一段高い處に小學校らしい大きな建物があるが、その廣場とも覺しきあたりから、二道の白い水が、碧なる大空に向つて、丁度大きな噴水器を仕掛たごとく、盛に眞直に迸出して居る。

そしてその末が美しく夕日の光にかゞやき渡つて見える。

「あれは何だね」

折から子供を背負つた十歲ばかりの洟垂しの頑童が傍に來たので、怪んで自分は尋ねた。

「あれア、喞筒だい」

と言つたが、見知らぬ自分の姿に其儘走つて行つて了つた。

成程喞筒に相違ない。けれどこの靜かな山中の村にあのやうな喞筒！　火事などは何十年有らうとも思はれぬこの山中に、あのやうな喞筒の練習！　自分は何だか不思議なやうな氣が爲て仕方が無かつたが、これは只何の意味も無い練習に止まるのであらうと解釋して、其儘其村へと入つて行つた。先最初に小さい風情ある溪橋、その畔に終日動いて居る水車、婆樣の繰車を回しながら片手間に商賣をして居る駄菓子屋、養蠶の板籠を山のごとく積み重ねた間口の廣い家、娘の唄を歌ひながら一心に機を織て居る小屋など、一つ〳〵顯はれるのを段々先へ先へと歩いて行くと、高低定らざる石の多い路の凹處には水が丸で洪水の退いた跡でもあるかのやうに滿ち渡つて、家々の屋根は雨あがりの後のごとく全く濕ひ盡して居る。

否、そればかりではない、それから大凡十間ばかり離れたところ

には、新しい一箇の赤塗の大きな喞筒が据ゑられてあつて、それから出て居る一箇のヅツクの管は後の尾谷の溪流に通じ、二箇の徑五寸ばかりの管は大空に向つて烈しい音を立てながら、盛んに迸出して居るのを認めた。

其周圍には村の若者が頰かぶりに尻はしよりといふ體で、その數大凡三十人許り、全く一群に爲つて、頻りにそれを練習して居る樣子である。喞筒の水を汲み上げるもの、ヅツクの管を荷ふもの、管の尖を持つて頻りに度合を計つて居るもの、やれ今少し力を入れろの、やれ管が少し横に曲るの、やれ洩るの、やれ冷いのと、それは一方ならぬ大騷で、世話人らしい印半纏を着た五十格好の中老漢が頻りにそれを指圖して居るにも拘はらず、一同はまだ好く喞筒の遣ひ方に慣れぬと覺しく、管から迸出する水を思ふ所に遣らうとするには、まだ餘程困難らしい有樣が明かに見える。一同は今水を學校の屋根に濺がうとして居るので、頻りに二箇の管を其方向に向けつつあるが、一度はそれが屋根の上を越えて、遠く向ふに落ち、一度は見當違ひに一軒先の茅葺屋根を荒し、三度目には學校の下の雨戸へしたゝか打ち付けた。

「やあ！」

と後で喝采した。

見ると、路の傍、家の窓、屋根の上、樹の梢などに老若男女殆ど全村の人を盡したかと思はるゝばかりの人數が、この山中に珍らしい喞筒の練習を見物する爲めに驚くばかり集つて居るので、旨く行つたとては、喝采し、拙く行つたとては、喝采し、やれ管が何うしたの、やれ誰さんがずぶ濡れになつたのと頻りに批評を加へるのであつた。

餘り面白いので、自分は思はず立留つてそれを見た。この多い若者の中に自分の友が交つて居はせぬかとも思はぬではなかつたが、さりとて別段それを氣にも留めずに、只餘念なく見惚れて居た。自分の前には川に浸けてある方の管が蛇ののたくつたやうに蟠つて、其中を今しも水が烈しい力で通つて行くと覺しく、針のやうな隙間から、しう〳〵と音して烈しく餘流が迸出して居る。で、一同はやつとの思ひで、其目的の學校の屋根に涼しい一雨を降らせたが、ふと其群の一人——古い手拭を被つて縞の單衣を裾短かに端折つた——が何か用が出來たと見えて、急いで自分の方へ下りて來た……と……思ふと、二人は顏を見合せた。

「おや、君ぢや無いか」

と自分は言つた。

「やア富山……さん！」

と根本行輔は驚いて叫んだ。

丸きり六年逢はぬのだが、その風貌といひ、その態度といひ、更に昔に變らぬので、これを見ても、山中の平和が、直ぐ自分の腦に浮んだ。

渠は限りなき喜悅の色を其穩かな顏に呈して、頻りに自分の顏を見て居たが、不圖傍に立つて居る其家の家童らしい十四五の少年を呼び近づけて、それに、この御客樣を丁寧に家に案內せよといふ事を命じ、さて自分に向つては、

「失禮だすが、村の若い者でこんな事を遣り懸けて居ますだで……一足先に家に行つて休んで居て下され。もうすぐ濟むだで、跡から直きに參じますだに」

自分は小童に導かれて、其儘根本行輔の家へと行つた。一方稻の穗の豐年らしく垂れてゐる田、一方甜瓜の旨さうに熟して居る畠の間の細い路を爪先上りにだら〳〵とのぼつて行くと、丘と丘との重り合つた處の、やゝ低く凹んだ一帶の地に、一棟の茅葺屋根と一つの小さい白壁造の土藏とがあつて、其後には欅の十年ほど經つた疎らな林、その周圍には、蕎麥や、胡瓜や唐瓜や、玉蜀黍などを植ゑた畠、猶近づくと、路の傍に田舍には何處にも見懸ける不潔な肥料溜があつて、それから薪を積み重ねた小屋、雜草の井桁の間に滿遍なく生えて居る古い井、高く夕日の影に懸つて見える、桔槔、猶そ

の前に、鍬や鋤を洗ふ爲めに一間四方ばかり水溜が穿たれてあるが、これはこの地方に特有で、この地方ではこれを田池と稱へて、その深さは殆ど人の肩を沒するばかり、鯉、鮒の魚類をも其の中に養つて、時には四五尺の大きさまで育てる事もあるといふ話。周圍には萱やら、薄やらの雜草が次第もなく生ひ茂つて水際には河骨、撫子などが、やゝ濁つた水にあたらその美しい影をうつして、居るといふ光景であつた。山縣の話に、自分が十五六の惡戯盛には相棒の杉山とよくこの田池の鯉を荒して、一夜に何十尾といふ數を盜んで、殆ど始末に困つた事があつたとの事を聞いて居つたが、その所謂田池がこんな小さな汚穢い者とは夢にも思つて居らなかつた。否、其友の家――村一番の大盡の家をもこんな低い小さいものとは？

ふと見ると、その田池に臨んで、白い手拭を被つた一人の女が、頻りに草刈鎌を磨いで居る。

「神さまア、旦那樣に吩咐かつて東京の御客樣ア伴れて來たゞア」

と小童は突如に怒鳴つた。

女は驚いて顏を上げた。何處と言つて非難すべきところは無いが、色の黑い、感覺の乏しい、黑々と鐵漿を附けた、割合に老けた顏で、これが友の妻とすぐ感附いた自分は、友の姿の小さく若々しいのに比べて、いかにこの妻の丈高く、體格の大きいかといふ事に思ひ及んだ。これは大方東京で餘り「老いたる夫と若い妻」との一行を見馴れた故であらう。

自分はその妻の手に由つて、直ちに友の父なる人に紹介された。父なる人は折しも鋸や、鎌や、唐瓜や、糸屑などの無茶苦茶に散ばつて居る椽側に後向に坐つて、頻りに野菜の種を選分けて居るが、自分を見るや、兼ねて子息から噂に聞いて居つた身の、さも馴馴しく、

「これは〳〵東京の先生――好う、まア、この山中に」

といふ調子で挨拶された。

流石は若い頃江戸に出て苦勞したといふ程あつて、その人を外さぬ話し振、その莞爾と滿面に笑を含んだ顏色など、一見して自分はその尋常ならざる性質を知つた。輪廓の丸い、眼の鋭い、鼻の尖つた顏のつくりで、體格は丸で相撲取でもあるかのやうに、でつぷりと肥つて、體重は二十貫目以上もあらうかと思はれるばかりであつた。これが當年の無賴漢、當年の空想家、當年の冒險家で、一度はこの平和な村の人々に持餘されて、莚に包んで千曲川に投込まれようとまで相談された人かと思ふと、自分は悠遠なる人生の不可思議を胸に覺えずには居られぬので。

此時、奴僕らしい三十前後の顏の汚い男が驅けて遣つて來て、

「大旦那さア、がいに暑いんで、馬が疲れて、寢そべつて、起きねえが、はア何う爲べい」

と叫んだ。

「まだ寢そべつたか、困るだなア、汝、餘り劇く虐使ふでねえか」

「虐使ふどころか、此間も寢反つたゞから、四俵つけるところを三俵にして來たゞアが」

「何處へ寢反つてるだ」

「孫右衛門どんの垣の處の阪で、寢反つたまゝ何うしても起きねえだ、己あ何うかして起すべい思つて、孫右衛門さん許へ賴みに行つたゞが、少い娘つ子ばかりで、何うする事も爲得ねえだ」

「仕方の無え奴等だ」

と罵倒したが、傍に立つて居る子息の妻に向つて、

「ぢや御客樣にはえらい失禮だが、私あ馬を起しに行つて來るだあから、お前は御客樣を奥に通して、行輔が歸つて來る迄、緩り御休ませ申して置け」

自分に向つては、

「それぢや、先生樣失禮しやす？」

自分の挨拶をも聞かず、

「一所に歩べ……おい、作公、何を愚圖〳〵してやがるんだ？」

と怒鳴りながら走つて行つた。

同時に自分は奥の一室へと案内される。奥の一室――成程此處は少しは整頓して居る。床の間には何んな素人が見ても贋と解り切つた文晁の山水が懸つて居て、長押には孰れ飯山あたりの零落士族から買つたと思はれる槍が二本、さも不遇を嘆じたやうに黒く燻つて懸つて居る。けれど都とは違つて、造作は確乎として居るし、天井は高く造られてあるから風の流通もおのづから好く、只、馬小屋の蠅さへ此處まで押寄せて來なければ、中々居心の好い靜かな室であるのだが……

やがて妻君は茶器を運んで來たが、おづ〳〵と自分の前に坐つて、そして古くなつた九谷燒の急須から、三十目くらゐの茶を汲んで出した。

「田舍は靜かで好いですナア」

と自分はそれとなく言ふと、

「いゝえ、靜かどころでは、……此頃は、はア、えらく物騷で……」

「何うしてゞす」

と自分は怪んで尋ねた。

「此頃は、はア、えらく火事があるんで、夜もゆつくり寢ては居られないで、はア」

「何うしてゞす?」

「何うしてといふ譯も無えだすが……」

と躊躇ふのを、

「放火なのですか」

「はア」

「誰か惡い者でもあるんですか」

「はア、惡い者があつて、どうも困り切りますだア」

暫時沈默。

「はア」と自分は緩い茶を一杯啜つてから、「それでゞすナア、今喞筒を稽古して居るのは?」

「貴郎さアも見て御座らしやつたゞか、火事が、はア、毎晩のやうにあつて、物騷で、仕方が無えものだで、村で、割前で金のう集めて、漸く東京から昨日喞筒が出來て來たゞア」

「東京から喞筒?」

「はア、昨日出來て來たばかしで……村にやもう何十年と火事なんぞは無いだで、喞筒なんぞは有りませんだつたが、今度は、はア仕方が無えのでごわす。そして、今夜にも火事が打始らねえ者でも無えといふので、若い者が午から學校へ寄り集つて、喞筒の稽古を爲て居るんでごわす。……」と少時途絶えて、「でも、……大方水は撒いたやうだで、もう直き歸つて來るでごわしやう」

と言つたが、更に氣を更へて、

「まア、御疲れだせうに、緩くり横にでも成つて休まつしやれ。牟禮には三里には遠いだすから」

と古い黑塗の枕を出して、そして挨拶して次の室へ下つた。

見ると、中々好い眺望である。地位が高いので、村の全景がすつかり手に取るやうに見えて、尾谷川の閃々と夕日にかゞやく激湍や、三峯の牛の臥たやうに低く長く連つて居る翠微や、猶少し遠く上州境の山が深紫の色になつて連り亙つて居る有樣や、ことに、高社山の卓れた姿が、此處から見ると、一層魁偉の趣を呈して居るので、その雲煙の變化が少なからず、自分の心を動かしたのであつた。あゝこの平和な村！　あゝこの美しい自然！　と思ふとすると、今言つた細君の言葉がゆくりなく簇々と自分の胸に思ひ出された。この平和な村に喞筒！　この美しい村に放火！　殊に何十年とそんな例が無かつたといふこの村に！　これは何か意味が無くてはならぬ。これは必ず不自然な事があつたに相違ないと自分は思つた。空想勝なる自分の胸は今しもこの山中にも猶絶えない人生の巴渦の烈しきを想像して轉た一種の感に撲れたのであつた。

六

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com